

## 学習院大学図書館蔵「諸大名登城之図」について

根 岸 茂 夫

### はじめに

近年、近世の政治社会を考察する儀礼論が盛んであるが、その多くは、殿中の席次と大名の官位や由緒を考察する江戸城中の儀礼とその史料学的考察<sup>(1)</sup>、献上と贈答の儀礼を通してそこに動員・編成され、その由緒を属する集団の存続に利用するさまざまな階層までを考察する由緒論などに大別<sup>(2)</sup>することができる。殿中儀礼の考察には殿中図・席次図・衣装などの視覚的史料により説明されるものの、参加者のみの問題でそこに動員されながらその場に列席できない多くの下部の人々にとっては、直接的な関係はない。一方で献上と贈答儀礼の考察には、あまり視覚的な視点はみられず、儀礼の意義を強調するものの儀礼の姿を検討しているわけではない。他方、参加できない階層にとって、儀礼の象徴として視覚的に映るのは、儀礼の場に向かう参加者の行列であり、ことに近世最大の政治都市である江戸において、江戸城中に向かう諸大名・旗本の行列がその最たるものであったといえる。ただし、その行列は大半が江

戸城の下馬先で待機したのである。

下馬先とは、江戸城の大手門などの前の広大な広場であり、門内に馬に乗って入ることを禁止した「下馬札」があった。大名・旗本はここに供連の大半を待機させたため、江戸屋敷の藩士や陪臣・奉公人など膨大な人数がここに集まり主人の下城を待ったのである。なお乗物が許されているものは、さらに二之丸の下乗橋までわずかな供を連れて進み、そこで乗物を降りた。

そのような下馬先は、藩士たちの個別の藩を超えた話し合いや情報収集の場であり、「下馬評」という言葉に象徴されるように、彼らの政治に対する評判や世論形成の場でもあった。<sup>(3)</sup> また行列を見物するさまざまな階層がここに出かけ、待機する侍や奉公人を相手とする物売りも登場しており、まさに儀礼としての行列を見物し楽しんだり、<sup>(4)</sup> そこで営業したりする、儀礼に参加できない人々の空間ともなっていたのである。学習院大学図書館には、明治二十四年（一八九一）に大久保一岳の手になる「諸大名登城之図」が収蔵されている。その収蔵に至った詳しい経緯は不明であるが、戦前までに学習院において使用された教育用の掛図などとともに架蔵されていたといい、学習院の生徒の教育に使用する目的で収蔵されたものと思われる。図には下馬先のありさまが様々な姿態で動きに満ちて描写されており、江戸東京博物館に収蔵される佐竹永湖画「江戸城年始登城風景図屏風」<sup>(5)</sup>（明治三十一年成立）に類似している。ただし同屏風のほうが作成年代が新しく、図柄も「諸大名登城之図」より省略されているところから、大久保一岳の図を佐竹永湖が模したか参考にしたと思われる。以下、「諸大名登城之図」を検討し、幕末の下馬先の姿を再現していきたい。

## 一 「諸大名登城之図」の構図と作成

学習院大学図書館に収蔵される「諸大名登城之図」は、紙本彩色、縦八五センチメートル、横八四九センチメートルの長大な図巻で、江戸城に礼装して登城する諸大名旗本の行列と、その従者たちが下馬先で整然とあるいはくつろぎながら待機し、食物売りや番付売りの商人が従者たちを相手に商売している様子、見物人と思われる武士・町人や女性・子供までを生き生きと描いた図である（□絵図版3〜8）。遠近法が使用され、遠くの人物は小さく省略して描かれ、上部には江戸城三之丸・本丸・西之丸の門・櫓・堀・石垣・水濠が、遠景には富士山を始め山々が見える。絵は空白によって二つの場面に別れる。右から大手門がやや遠景に描かれ、登城する旗本などの行列が描かれた後、空白の部分を作って場面を切り替え、内桜田門から坂下門、二重橋・西之丸大手門のあたりを描き、特に内桜田門から坂下門にかけてが最も詳細かつ華やかに、人数もここに集中して描かれている。そして西之丸大手門から外桜田門に向かうあたりで場面は次第に遠景になり消えていく。全体として内桜田門から西之丸の下馬先が中心となっており、江戸城の正面玄関となる大手門の下馬先はややさびしい感がある。なお、各門には門松が立てられ、正月の風景となっている。

奥に「明治廿四年三月吉辰 一岳大久保好伴謹写」と墨書され「式岳 権田朱印記」と「大久保好伴之印」角朱印記の落款二顆が捺されている。大久保一岳については後述するが、本図には「正月元旦為拝賀在府之諸大名登城図伝」（以下「図伝」と略称）と称する野紙袋綴の書冊が添付している。以下その一部を示しておく。

諸大名登城之図伝

正月元旦為拝賀在府諸大名登城之図ハ、一岳好伴曾テ下馬場ニ参入、而シテ竊ニ登城之行列ヲ悉ク描写ス、維于時安政六己未年正月元旦也、其行列ハ皆各家之位階ニ随ヒ且ツハ格式ニ拠テ其威儀令嚴タリ、慶応年中ニ至リ図稿已ニナリシ処、同三丁卯年十二月幕府政權ヲ奉還シ遂ニ明治戊辰ニ至リ、王政維新東西騒乱之際ニ属シ、此図稿散逸セリ、今是ヲ図画セザレバ後世絶テ伝フル事ナカレ、之ニ因テ一岳更ニ此図稿ヲ集成シ、爰ニ二十有余年ヲ歴テ漸ク一幅ノ大図ヲナス、於是乎幕府改典之盛ナル事ヲ觀、宜シク考証ノ資トナサント云フ、

明治廿四年春三月

一岳大久保好伴謹写并誌（一式岳）楠田朱印記

正月元旦為拝賀在府之諸大名登城図伝

御本丸大手御門

御門外下馬場ニハ式日當中詰之御書院御番頭・御小性組御番頭・御小納戸衆等ノ御供侍ナリ、其ハ格式ニヨリテ駕籠又ハ乗馬ニテ登城スルナリ、或ハ駕籠ニ乗リ西丸留守居  
松平對馬守、又乗馬ニテ御書院御番頭  
大久保紀伊守、途中ニ於テ互ニ会釈ノ礼アリ、又布衣ノ士ノ登城スル行装アリ、各々其風俗聊カ異ナリ、図画ニ就テ看給フベシ、

二ノ丸櫓

中ノ御門櫓

内桜田御門 又桔梗御門トイフ、

此御門ヨリ在府之諸大名悉ク登城アリ、御規式ニ付諸大名登城之節ハ何ニノ、御門外東北ノ方第一ニ大廊下詰加賀

宰相槍二本トモ、大広間松平陸奥守槍二本トモクロト、大広間松平中納言槍二本トモ、御嫡子松平安芸守槍一本トモモモエキ、大

広間伊達遠江守槍クロラシヤ、御嫡子伊達大膳大夫槍モエキ、大広間松平土佐守槍トリ毛、等其外諸大名ノ惣供羅

列シ、何レモ其場ニテ控ヘ待ツナリ、又御門外東南ノ方ニ大広間詰細川越中守槍クロラシヤ、大広間松平肥前守

槍トクサラシ、溜間井伊掃部頭槍クリ色、大広間藤堂和泉守槍二本トモ、等之諸大名惣供之レニ羅列シ、又統テ御普

代ノ諸大名帝鑑間詰奥平大膳大夫、柳間亀井能登守、雁間松平伯耆守、菊間田沼玄蕃頭等ノ惣供連ノ向下馬場

ニ付テ之レニ待ツ、其人数群集シテ誠ニ錐ヲ立ルガ如シ、其御槍并ニ引馬鞍覆ノ御紋ニテ看知ルベシ、爰ニ悉

ク記サンハ煩ハシケレバ概略ヲ挙テイフ、宜シク考証ノ資トナサント云フ、

当日下馬場ニ出テ飴菓子等ヲ売者アリ、又越中富山ノ売菓数名出ツ、又大名ヅケト唱ヘ袖中武鑑等ヲ売来ル者

アリ、又諸方ヨリ為見物出テ来ル者アリ、又町人年始トシテ通行スルアリ、其外図画ニ就テ風俗ヲ看給フベシ、

御本丸寺沢二城

四方見櫓

同

上ウツミ二城

富士見櫓三重

辰巳三城

蓮池二城

坂下御門

御門外ニハ御小納戸・御小性・留守居等之惣供待ナリ、

紅葉山

西丸御太鼓櫓

大廊下詰島津宰相薩摩家登城供連レハ槍二本トモハクマ、徒ノ先金紋先箱ニテ駕籠舁看板紺スジ目引ヲ着ス、又

続テ大広間詰松平大膳大夫毛利家槍前黒トリ毛、後槍黒ラシャ、先箱金紋黄長革、登城供連之式、各々其行列威儀タ

リ、

西丸御書院御玄関

御書院御門

帝鑑間詰松平下総守登城供連ハ先箱金紋、槍クマ毛・白トリケ、駕籠舁陸尺看板柿色長羽織ヲ着ス、又続テ交代寄合櫓

原織部乗馬ニテ登城供連ノ式、又続テ高家衆宮原撰津守乗馬ニテ登城供連等各々其格式ニヨリテ也、爰ニハ大

略ヲ記ス、尚図画ニ就テ其風俗ヲ考ヘ看給フベシ、

二重橋

中仕切御門

西丸大手御門

以上御本丸大手ヨリ西丸大手御門ニ至ル之図ナリ、

右江戸城之図ハ別ニ記載シテ参考ニ備ヘントス、就テ見ベシ、

左ニ記載ス諸大名登城之図、御槍印ハ覽者ヲシテ検閲ニ便ナラシメンガ為ナリ、但シ参勤交代ノ分ヲ示スナリ、

本丸大手御門

(鎗印図)	黒ツミゲ	岩城伊予守	二万石 柳間	羽州亀田
(鎗印図)	クリ色タ、キ	三淵虎次郎	三百俵	御小納戸衆
(鎗印図)	クリイロタ、キ	島田弾正	三百石	同
(鎗印図)	クロラシヤ	高木内蔵頭	三百俵 布衣	御先手御持弓頭
(鎗印図)	セイヒツ	前田志磨守	三百俵	御小性衆
(鎗印図)	白タ、キ	大久保紀伊守	六千石	御書院御番頭
(鎗印図)	黒タ、キ	松平対馬守		西丸御留守居
(鎗印図)	赤ナメシ	近藤石見守	五千四百五十石	御小性組御番頭

(後略)

奥に岩城伊予守以下一三九名の大名旗本の鎗印、氏名、俸禄、役職などが記され、描かれた彼らの行列や待機する従者たちに対応しており、本図と対照すると、鎗印や家紋から大名旗本を特定できる。その氏名などは表1に示した。「図伝」では、序の部分で本図の成立を次のように説明する。この図は作者の大久保一岳が、安政六年（一八五九）正月元日に江戸城下馬先に赴き、諸大名の登城の行列を写し、慶応年中に画稿ができたものの、明治維新の混乱の中で画稿を散逸させてしまった。二十余年ののち、今描かなければ後世に伝わらないと、さらに画稿を集成して一幅の図を作成したのである。

この説明は、安政六年正月元日の登城図は慶応年間に画稿としてできあがっていたが、散逸した後「更ニ図稿ヲ集成」すなわち増補して現在の図を作成したと読み取れ、必ずしも安政六年正月元日の登城を正確に描いたものでもな

表1 「江戸城下馬先図」登場の大名旗本

	氏名	俸禄	殿席	役職	所領	鎧	傘	長刀	参賀	備考
1	本丸大手御門 岩城伊予守	20,000	柳間		羽州亀田	1 黒ツミゲ				
2	三淵虎次郎	300俵		御小納戸衆*		1 クリ色タ、キ				文政3小納戸、天保4西丸小納戸、天保7卒
3	島田弾正政恒	300		御小納戸衆		1 クリイロタ、キ				天保5家齊小納戸、天保8西丸小納戸、天保12家定小納戸、安政5使番
4	高木内蔵頭正方	300俵	布衣	御先手御持弓頭*		1 クロラシャ				文政12先手弓頭、天保9持頭、嘉永2鎧奉行、嘉永4卒
5	前田志磨守	300俵		御小性衆*		1 セイヒツ				嘉永6本丸小性、安政3二丸留守居、文久2御免
6	大久保紀伊守	6000		御書院御番頭*		1 白タ、キ				天保7書院番頭、天保13大番頭
7	松平対馬守			西丸御留守居*		1 黒タ、キ				嘉永3使番、安政3西丸目付、安政4目付、文久2大目付、文久3田安家老、元治1大目付、勘定奉行、慶応1差控、元治1一慶応1留守居格
8	近藤石見守	5450		御小性組御番頭*		赤ナメシ				天保10小性組番頭、天保14書院番頭
9	石川大隈守	4000		御小性組御番頭*		クロ				天保6小性組番頭、天保9西丸書院番頭
10	山田佐渡守	2500		御使番*		クロタ、キ・中ギン				文政10使番、嘉永4先手弓頭、文久2御免
11	平岡安房守道教	300俵		御小性衆		モヨギラシャ				天保8小性、嘉永4中奥小性、元治1辞任
12	曾我伊予守	6500		御書院御番頭*		セウフカワ				天保5書院番頭、天保10留守居
13	本目長門守親民	300		御小性衆*		キタ、キ				天保8小納戸、天保10小性、嘉永5小性頭取介、安政3二丸留守居、文久2小十人頭
14	山本美作守正路	900		御小性頭取衆*		キタ、キ				天保12西丸広敷用人、天保13辞任



15	二ノ丸	太田播磨守資芳	2000	新御番頭格奥勤*	クロ							天保12新番頭格、天保14小性組番頭格
16		水野出雲守忠篤	2500	中奥御小性衆*	セイヒツタ、キ							文政13小納戸、天保6中奥小性、弘化2卒
17	九	川勝主税氏章	700	御小納戸衆	赤タ、キ							嘉永6本丸小納戸、安政7辞任
18		田沼玄蕃頭	10000	菊間 遠州相良	三方赤ドウ・クロラシャ							
19		大岡兵庫頭	20000	若年寄* 武州岩槻	モヨギラシャ・中エヒ黒カワ							天保7若年寄、嘉永5卒
20		酒井大和守	22000	菊間 房州勝山	ス、タケ・上下赤ドウ							
21	中ノ御門櫓	稲葉兵部少輔	10000	菊間 房州館山	クロラシャ							
22		板倉棋津守	20000	菊間 備中庭瀬	クリイロナメシ・中ユイワ							
23		有馬玄蕃頭*	210000	大広間 筑後久留米	2 二本トモクロ	2		1	花イロ			玄蕃頭は文化9-弘化1
24		松平因幡守*	325000	大廊下 因州鳥取	2 二本トモクロ	1		1				嘉永3相模守
25		宗対馬守	100000	大広間 対州府中	2 二本トモクロラシャ	2		2				
26		松平土佐守	242000	大広間 土佐高知	2 花イロ・トリ毛	1		1	2 日			
27		伊達大膳大夫		嫡子	2 モヨキ・白クマケ	1		1				
28		伊達遠江守	100000	大広間 伊予宇和島	2 クロラシャ・クマケ	1	クロ	1	2 日			
29		松平安芸守		嫡子	2 二本トモモエキ	1		1				
30		松平中納言*	426000	大広間 芸州広島	2 二本トモクロ	1		1				明治 2 権中納言
31		松平陸奥守	625600	大広間 仙台	3 サルゲ・クロトリケ 2	1		1				
32	内桜田御門	加賀宰相*	1022700	大廊下 加州金沢	2 二本トモクロ	1		1				安政 2 権中納言
33		一柳土佐守	10000	柳間 播州小野	1 白	1	クロイロナメシ	1				
34		井上遠江守	10000	菊間 常州下妻	1 花イロ			1				
35		松平主殿頭	70000	帝鑑間 肥前島原	2 クロラシャ			1				
36		山内遠江守	13000	柳間 土州ノ内	1 ス、竹							
37		松平丹波守	60000	帝鑑間 信州松本	2 クロラシャ・モエキ	1		1				
38		安部棋津守	20250	菊間 武州岡部	1 クロラシャ			1				
39		堀田棋津守	10060	帝鑑間 下野佐野	1 花イロ			1				
40		松平左衛門尉	21200	帝鑑間 豊後府内	2 クロラシャ	2		2				
41		堀丹波守	30000	柳間 越後村松	2 クリイロ・ススタケ	1		1				
42		加藤大蔵少輔	10000	柳間 予州新谷	1 クロ			1	白ナメシ			
43		土岐準人正	35000	帝鑑間 上州沼田	2 クロラシャ			1				
44		酒井石見守	22500	帝鑑間 羽州松山	1 白			1				
45		西尾隠岐守	35000	帝鑑間 遠州横須賀	2 二本トモクロラシャ	1		1				

		氏名	俸禄	殿席	役職	所領	鎧	傘	長刀	参賀	備考
46		松平相模守	12000	菊間		下総多古	1 クロラシャ				
47		毛利山城守	40010	柳間		周防徳山	2 二本トモクロツミケ	1			
48		丹羽若狭守	10000	帝鑑間		播州三草	1 クロラシャ	1			
49		本多中務大輔*	50000	帝鑑間		三州岡崎	2 二本トモ油カミ	1			安政4美濃守
50		相馬大膳亮	60000	帝鑑間		奥州中村	2 クロラシャ	1			
51		阿部駿河守	16000	雁間		上総佐貫	1 ス、タケラシャ				
52		松平市正	32000	帝鑑間		豊後杵築	2 クロラシャ	1			
53		内藤丹波守	20000	帝鑑間		三州挙母	1 クロラシャ	1	クロイロ		
54		戸田備中守光大	5000		御書院御番頭*	1 白サメ					天保3書院番頭、天保7大番頭
55		細川越中守	540000	大広間		肥後熊本	2 クロラシャ・クロツミケ	1	1	2日	
56		松平肥前守	357000	大広間		肥前佐賀	2 トクサラシャ・赤ナメシ	1	1		
57	寺沢二城	井伊掃部頭	350000	溜間		江州彦根	1 クリイロナメシ			1日	
58		藤堂和泉守	323950	大広間		勢州津	2 ス、竹	1	1	ス、竹	
59		佐竹右京大夫	205800	大広間		出羽久保田	2 シロトリケ・クロラシャ	1	1	1日	
60		松平出羽守	186000	大広間		出雲松江	2 二本トモクロラシャ	1	1	2日	
61	四方見櫓	榊原式部大輔	150000	帝鑑間		越後高田	2 二本トモクロラシャ	1		1日	
62		松平越中守	110000	溜間		勢州桑名	2 クロトリケ・クリイロ				
63		松平三河守	100000	大廊下		美作津山	2 クロラシャ・クマウヘケ	1	1		
64		大久保加賀守	113129			相州小田原	2 クロラシャ・シロタ・キ			1日	
65		立花左近将監*	119600	大広間		筑後柳河	2 クロトリケ・クロラシャ	1			嘉永6飛騨守
66		本多下総守	60000	帝鑑間		江州膳所	2 クロトリケ・クロラシャ	1			
67	四方見櫓	松平米女正*	35000	帝鑑間		予州今治	2 クロラシャ・中ユヒカフシカワ	1			弘化3駿河守
68		松平遠江守	40000	帝鑑間		摂津尼崎	2 セウフカワ・角□□	1			
69		酒井雅楽頭	150000	溜間		播州姫路	2 クロツミケ	1	1	1日	
70		松平伊賀守	53000	帝鑑間		信州上田	2 天ノ毛	1		1日	
71		上杉弾正大弼	150000	大広間		羽州米沢	2 トクサ	1	1	2日	
72		松平伯耆守	70000	雁間		丹後宮津	2 クロ				
73	カミウツミ城	南部信濃守*	200000	大広間		奥州盛岡	2 クロラシャ	1	1		嘉永2美濃守
74		松平周防守	60400	帝鑑間		奥州棚倉	2 クロ	1			
75		薩摩宰相*	770800	大廊下		薩摩鹿児島	3 ハクマ・白鷹毛	1	シロ	1	安政5斉彬死去、忠義襲封、 安政6年2月少将修理大夫
76		奥平大膳大夫	100000	帝鑑間		豊前中津	2 クロラシャ・トクサ	1		1日	弘化2山形、安政5左近将監
77		水野越前守*	70000			遠州浜松*	2 クリイロタヘカワ・クリイロカワ				天保11隠岐守
78		亀井能登守*	43000	柳間		石州津和野	2 白トリケ	1			

79	大村丹後守	27970	柳間	肥前大村	2白ヌリ	1			
80	石川日向守*	60000	帝鑑問	勢州龜山	1クロ	1			嘉永6主殿頭
81	小笠原信濃守	10000	帝鑑問	播磨安志	1花イロラシャ	1			
82	南部丹波守	11000	柳間		1花イロラシャ	1			
83	本堂式部少輔	10110	柳間	常陸志筑	1白	1			
84	九鬼式部少輔	19500	柳間	丹波綾部	1クロラシャ	1			
85	諏訪因幡守	30000	帝鑑問	信州高島	2クロキン・クロキン	1			
86	伊東修理大夫	51080	柳間	日向飫肥	2クロラシャ	1			
87	京極長門守*	51512	柳間	讃岐丸亀	2クリイロツミケ・白ラシャ	1			嘉永2佐渡守
88	藤堂佐渡守	53000	柳間	勢州久居	2クリイロ・クロ	1			
89	松平阿波守	357900*	大廊下	阿波徳島	2モエキ・白ツミケ	1	1		
90	松平隠岐守	150000	溜間	伊予松山	2中ユヒムラクロ	1	1	1日	
91	松平越前守	360000	大廊下	越前福井	3クロクマケ・クロラシャ	1	1	1日	
92	松平右近將監	61000	大広間	石州浜田	2クロ	1	1		
93	富士見 櫓三重								
94	黒田甲斐守	50000	柳間	筑前秋月	2白ヌリ	1			
95	間部下総守*	50000	雁間	越前鯖江	2クロラシャ			1日	上洛中
96	青木大和守	48000	雁間	濃州八幡	2二本トモクリイロ				
	久世隠岐守	58000	雁間	総州関宿	2ス、竹・白			1日	隠岐守は天保4〜8、のち大和守
97	加納遠江守	13000	菊間	上総一宮	1中ユヒムギン・クロラシャ				
98	溝口信濃守	50000	柳間	越後新発田	2クリイロ・鼠ラシャ	1			
99	遠山美濃守	10021	柳間	美濃苗木	1花イロラシャ	1			
100	大久保出雲守	13000	菊間	相模山中	1花イロラシャ				弘化2長門守、万延1出雲守
101	細川能登守	35000	柳間	肥後熊本内	1クロラシャ	1			
102	佐竹宅岐守	20000	柳間	出羽秋田新田	1キラヤ	1			
103	森信濃守*	20000	柳間	播州赤穂	1クロツミケ	1			弘化1越中守
104	一柳兵部少輔	10000	柳間	伊予小松	1クロナメシ	1			
105	蓮池二城				1クロ				天保3西丸小性、嘉永6本丸小性、安政7中興小性
	岡部日向守長保	500俵		西丸小納戸*					
106	松下平次	100000	帝鑑問	武州忍	2クマケ・白トリケ	1	1	1日	
107	坂下御門	369000	大広間	長州萩	3クロトリケ・クロラシャ	1	1	2日	安政1長門守
108	上杉左近	1496		表高家衆	1モエキラシャ				
109	紅葉山	6000		御書院御番頭*	1クロタ、キ	1			天保6書院番頭、天保10御側
110	大森刑部	4500		御寄合衆	1クリイロ				
111	吉川一学	1100		御小納戸衆	1キタ、キ	1			嘉永6本丸小納戸、安政7徒頭

		氏名	俸禄	殿席	役職	所領	鍵	傘	長刀	参賀	備考
112	御太鼓櫓	依田伝之助	300俵		御小納戸衆*		クロタ、キ	1			嘉永6本丸小納戸、安政6二丸留守居
113		三浦伊織	500				1 クリイロタ、キ				
114		滝川十次郎	300		御小納戸衆*		1 クロラシャ				文政13小納戸、天保8西丸小納戸、天保12船手、嘉永3辞任
115		谷庄三郎	300俵		御小納戸衆*		1 白タ、キ				天保12小納戸、同年西丸小納戸、弘化4卒
116		宮原弾正大弼	1140		御高家衆*		1 クロタ、キ				安政6、12、8部屋住より見習
117		戸田阿波守氏寧	3500		御書院番頭*		1 クロタ、キ				天保2書院番頭、天保8大納言附
118		新見内匠頭正長	700		御小性衆*		1 セイシツ・三方シンチウ				嘉永6小性、安政4卒
119	御書院 御玄関	小笠原弾正少弼	5000		大御番頭*		1 ス、竹ラシャ				天保3大番頭、天保8辞任
120		堀八郎左衛門	1500		御小納戸頭取衆*		1 セイヒツタ、キ	1 キ			文化10西丸小納戸、天保8本丸小納戸、天保9辞任
121		鳥居権之助	1500		御小納戸衆		1 クロ				嘉永6家定小納戸、安政7使番
122		新庄下野守直敬	300俵		御小性衆*		1 モエキラシャ				天保8小性、嘉永6家定小性、安政5新番頭、慶応2御免
123		川勝中務	2500				1 キ色タ、キ				
124		松下平六郎忠綱	500		御小納戸衆*		1 クロ				文政13本丸小納戸、天保8西丸小納戸、天保
125		松下主馬	500		御小納戸衆*		1 クリイロタ、キ				柳宮補任6-P173によると平六郎と主馬は同人物
126	御書院 御門	高木修理	2500		交代御寄合		1 花イロ	1			
127		武田大膳大夫	500		高家衆		1 モエキラシャ				安政4見習、安政5家督
128	二重橋 中仕切 御門	山名忠岐守	600		御小性衆		1 クリイロタ、キ				天保8小性、嘉永4頭取介、安政5頭取、万延1新番頭格
129		吉松土佐守正達	300俵		御留守居*		1 クロ				文政9先手鉄炮頭、天保7鍵奉行、天保8西丸留守居、弘化4旗奉行、嘉永3卒
130	西丸大 手御門	中野讃岐守清賢	500		御小性衆		1 クロラシャ				文政11小性、安政5頭取介、万延1頭取、文久2小十人頭
131		駒木根大内記	1700				1 クロケシタ、キ				

132	阿部主税	3000	御寄合衆肝煎	1	クロータ、キ・ギン				(不明)
133	長沢大蔵	1400	表御高家衆*	1	クロータ、キ				武鑑「前田上総介 安政3」
134	前田右近	1000	表御高家衆	1	セエギラン	1			柳宮補任「前田主馬 安政3」
135	溝口謙政守直清	5000	中興御小性衆*	1	花イロラン				天保5家定小性、天保9中興小性、弘化4百人組頭、嘉永3西丸八性組番頭、嘉永7雪院番頭、安政3浦賀奉行、同年書院番頭格、万延1書院番頭、文久1大目付、文久2番頭、文久3大目付、元治1留守居、慶応3隠居
136	榊原總部	1800	交代番台	1	セエギラン				文政13小納戸、天保8西丸小納戸、同年辞任(元治2使番、慶応1目付、慶応2辞任)
137	加藤寅之助	1500	御小納戸衆*	1	白タ、キサギン				嘉永7肝煎
138	水野日向守	18000	「下総結城」	1	クワケ				
139	宮原棋津守	10000	御高家衆	1	セエギラン				

(注) \*は、安政6年正月ではあり得ないと確認できるもの。参賀は『藤岡屋日記』、備考は小川恭一『江戸幕藩大名家事典』『諸侯年表』等によった。

いとも受け取れる表現である。

作者の大久保一岳好伴については、その伝記を明らかにできない。幕末の洋風画家大久保一丘の子といわれる。<sup>(6)</sup>一丘は遠江横須賀藩の藩士かつお抱え絵師として文化年間以来活躍し、安政六年十一月一〇日に没したという。洋風の人物を描いた「真人図」が知られており、キリストを描いたものであり隠れキリシタンではなかったかという説もある。子の好述・好伴の二人の兄弟が一岳を名乗り、兄の好述は父と同日に死去したといい、弟の好伴は弘化二年(一八四五)に生まれ、柴田是真の門下となり、明治二四年に死去したと伝えられる。<sup>(7)</sup>これが正しければ、本図は父と兄の死去した年の正月参賀図であり、一岳自身が死去した年に完成したことになる。<sup>(8)</sup>本図の画風について論じる能力は



図1 駕籠（西丸留守居松平対馬守）と馬上（書院番頭大久保紀伊守）から挨拶を交わす旗本

ないが、遠近法の採用に父以来の洋風画法を見出すことはできよう。

## 二 描かれた大名と旗本

次に「図伝」の説明にしたがって図を見ていく。大手門のあたりにには、書院番頭・小性組番頭・西之丸留守居・小納戸・使番・先手頭など旗本が乗物・馬上・徒歩で登城する。右下に素襖で登城するのは4先手持筒頭高木内蔵頭（登場する大名旗本は、表1の番号を頭に付した、以下同）、馬上で乗物に会釈するのは6書院番頭大久保紀伊守、乗物は7西之丸留守居松平対馬守である。大手門の右側に小さく描かれた行列は、1出羽亀田藩主岩城伊予守であり、大手門周辺では大名は岩城氏のみである。また大手門の内側は鬱蒼とした森に描かれ、ややさびしい趣である。

空白の部分の左手には桜田異二重櫓（「図伝」には「二ノ丸櫓」とあるが、三之丸）が大きく描かれ、堀と石垣に沿って内桜田門がある。櫓のあたりには書院番頭・中奥小

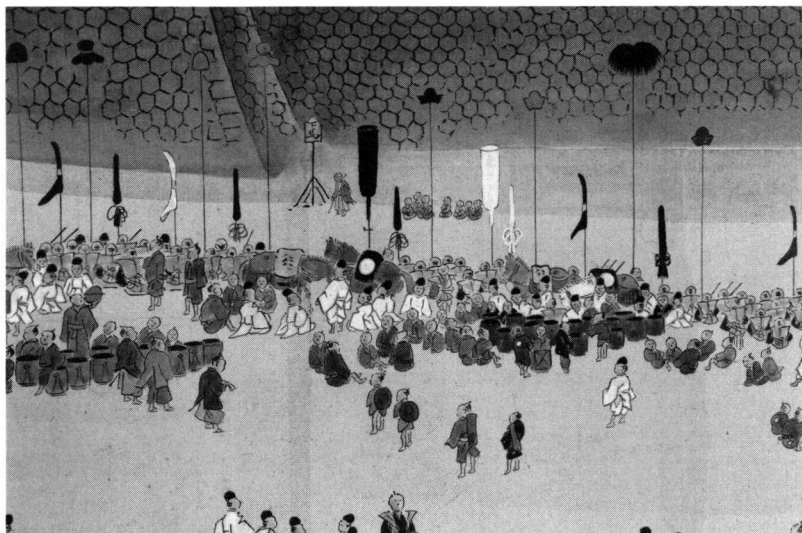


図2 内桜田門の下馬札と仙台伊達・宇和島伊達・広島浅野・高知山内家の従者たち

性・小性・小納戸などの旗本の行列が待機している。大紋を着用した16中奥小性水野出雲守が馬上で登城する行列もあるが、主人はすでに登城しているものが多く、従者が待機して腰を下ろしたり寝そべったりして休んでいる姿も散見する。

その左の前方には18田沼玄蕃頭・22板倉楨津守など菊間詰の譜代大名の従者たちが待機している。その手前には、さまざまな服装をした従者たちが列を離れたり、主人が異なるもの同士で話に興じている姿も描かれている。作者の大久保一岳は「幕府改典之盛ナル事」を見るために図を作成したと「図伝」に記しているが、画中では行列の威儀よりも、このような従者たちの多様な姿態が生き生きと描かれている。

菊間詰大名の従者たちの後方、内桜田門の右側に小さく並んでいるのが、32金沢前田・31仙台伊達・30広島浅野・26高知山内・25対馬宗・24鳥取池田・23久留米有馬家といった大廊下・大広間詰の有力な外様大名であり、門に最も近い場所に前田家の行列が待機している。<sup>10)</sup>

内桜田門から坂下門にかけて西之丸下の西北のあたりは、遠景には富士山があり、鶴が数羽飛んでおり、江戸城の櫓や

殿舎の屋根が最も壮大に描写しているのがこの部分である。堀端を、本図の中で最も人数の多い行列が威儀を正して通過しているのが、75薩摩島津家である。島津家の行列を見つめるように、図の中段に内桜田門から55熊本細川・56佐賀鍋島・58津藤堂・59秋田佐竹・71米沢上杉・65柳河立花家など大廊下・大広間詰の外様大名とともに、57彦根井伊・60松江松平・61高田樺原・62桑名松平・63津山松平・69姫路酒井・76中津奥平家など大廊下・大広間・溜間・帝鑑間詰の有力な譜代大名の行列も並んでいる。手前の下段には右から33播磨小野一柳・34常陸下妻井上・35島原松平・37松本松平家など柳間詰の外様小大名、菊間・帝鑑間詰の譜代大名の行列がさまざまな姿態で待機している。「図伝」に記されている諸大名・旗本の約半数の行列がこの内桜田門から坂下門辺に集まっており、作者が最も力をいれて描いた場所と推測される。かつ、その下部には余興に興じたり場所から離れた従者たちが食物売りの商人のところに群がった姿や、見物人の女子供までが登場しており、遠くに小さく見える有力大名の従者の列に比べていねいに描かれ動きに富んでいる。それは「図伝」にも記されるように、作者自身も見物人としてこの風景を眺めていたためであろう。その見物の場所が、西之丸下に設定されているのである。

「図伝」に「辰巳三城」と記される蓮池巽三重櫓が、江戸城の建築中最も壮大に描かれているのは、西之丸下にこの櫓が張り出すようにそびえていたからであろう。その櫓を指すように登城の行列がひときわ大きく描かれているのが、106武蔵忍の松平下総守である。

坂下門から二重橋・西之丸大手門のあたりはやや遠景に描かれるが、島津家の行列に続くように坂下門の前を通る行列が、107長州萩毛利家であり、後部は小さくやや省略されているように見える。薩摩と長州の行列が威儀を正して描写されている箇所は、明治期における作爲的な意図も感じさせるが、忍松平が大きく描かれているのは明らかにではない。毛利と忍松平の行列のあいだに挟まれるように、小納戸・小性・留守居などの旗本の従者が待機し、なかには



近くを通る行列を無視するように寝そべて話しに興じるなど、大名の従者と比べて統制が取れていないさまが描かれ、その左手には場所からはなれて下馬評に興じたり、食物売りの商人に群がったりする従者や、さまざまな物売りなどが大きく書き込まれている。それは、旗本の従者のほとんどが、徒や若党も含め人宿から臨時に雇い入れた日用層であったことを反映するものである。

そのようなざわめきの脇を、大紋を着用した<sup>136</sup>交代寄合榊原伊織が馬上で登城し、その後ろを<sup>139</sup>高家宮原摂津守が狩衣を着用し同じく馬上で登城しているが、物売りに集まった従者たちはこれらの行列を無視するように後ろを向いている。また合羽籠の行列が数筋続いているが、すでに到着し待機している供たちの雨具を届けにきたものであろうか。

以上、長大な図巻を冗長に説明したが、登城の行列と下馬先に待機する従者たち、それを目当てにした物売りや見物人までが描かれ、ことに図の中央に大きく下部前面に描かれているのは、列をはなれて下馬評に興じ、物売りに群がる従者たちや見物人などである。作者自身が登城の行列の中から下馬先の様子を見ているのではなく、見物人として西之丸下において城門から最も離れた場所で、武鑑を片手に行列を眺めているような視点から描かれたものといえる。かつ、その視点が遠近法を効果的なものとしている。

本図に描かれた諸大名旗本は、表の通り一三九名を数えるが、かれらが安政六年正月元日に登城した事実があるのかを確認したい。

天保八年（一八三七）に刊行された大野広城『殿居囊』前篇<sup>(1)</sup>の武家年中行事によれば、正月元日には「御家門方・御譜代大名・御役人三千石以上太刀目録献上」、二日には「御三家方御嫡子・国主・城主、外様大名并喜連川左兵衛督、装束ニ而辰刻出仕御礼」とある。小野清『徳川制度史料』<sup>(12)</sup>にも、正月元日には「三家・三卿初メ譜代大名、特別

ノ御縁故アル外様大名・交代寄合・表高家・諸役人・無官ノ従五位・布衣」等であり、二日に「三卿ノ子息、三家ノ嫡子、外様大名、万石以下ノ従五位・布衣、御目見以上諸士・連歌師・神道方等」とあり、元日には外様大名は特別の縁故がない限り登城しないと記している。本図と同様に、江戸の繁昌ぶりを記録しようと明治二二年に編述された市岡正一『徳川盛世録』<sup>13</sup>も、元日には三家や越前松平、譜代大名などのほかに金沢前田・鳥取池田・大聖寺前田が登城し、二日に国主・准国主・喜連川および外様大名が出仕すると記されている。元旦を写生したという本図で、大広間席の国持大名や柳間席の外様大名の従者が描かれているのはこの説明と合わない。

『藤岡屋日記』<sup>14</sup> 卷七十一には、安政六年正月江戸城参賀の儀式次第を次のように掲載している。

○正月朔日

一 今辰下刻、御白書院江出御、

着座

紀伊宰相殿

尾張宰相殿

初而 松平越前守

右年頭之御礼、御太刀目録を以被申上之、次ニ越前守、御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

一 水戸中納言殿・加賀中納言、名代之以使者御太刀目録被献之、老中披露、

着座

井伊掃部頭

年頭之御礼、御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

右同断、御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

松平讃岐守

松平左京大夫

藤堂和泉守

松平肥後守

松平下総守

松平宮内大輔

松平大学頭

煩

松平播磨守

松平隱岐守

松平民部大輔

藤堂大学頭

酒井雅楽頭

本多美濃守

太田備後守

京都御使

間部下総守

松平和泉守

内藤紀伊守

脇坂中務大輔

煩

堀田備中守

青山下野守

松平伊賀守

久世大和守

右同断御礼、忝人ツ、御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

松平掃部頭

松平大蔵大輔

榊原式部大輔

大久保加賀守

土屋采女正

奥平大膳大夫

松平豊前守

右同断御礼、老人ツ、御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

(中略)

○正月二日

一今已上刻、御白書院江出御、

松平左兵衛督

右年頭之御礼御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、畢而大広間江渡御、

着座

松平筑前守

煩 細川越中守

松平内蔵頭

上杉弾正大弼

松平出羽守

煩 津輕越中守

煩 松平土佐守

松平下野守

松平長門守

佐竹右京大夫

伊達遠江守

右同断御礼、老人宛御太刀目録持参申上之、御盃頂戴、呉服台ニ而拝領之、

丹羽左京大夫

(後略)

(傍線筆者、本図に登場しない氏名)

『藤岡屋日記』は聞書・噂などを筆記したものであり、内容には検討が必要であるが、登場する大名をみると、94  
間部下総守詮勝が上京して不在と記されており、彼が正月に上洛しているのが安政六年のみであるところから、掲載  
した史料は安政六年と確認できる。同書によると、『殿居囊』『徳川制度史料』『徳川盛世録』などと同様に、元日に  
は紀伊徳川家を始め御三家・連枝・譜代大名と、32前田家など一部の外様大名が参賀し太刀目録を献上しているが、  
傍線を付した大名は、本図には登場しない。また内桜田門の前に待機していた金沢前田家も、この年は在国しており、  
水戸家と同様に名代の使者が太刀目録を献上しているのである。前述した鯖江の間部詮勝は、この時期には朝廷工作  
のため京都に滞在しており、十二月晦日に参内している。『藤岡屋日記』にも「京都御使」と記されているが、本図  
では従者が待機している姿が描かれている。二日に国持大名など外様大名が参賀しているが、『藤岡屋日記』二日条  
に登場する大名のうち、傍線のないものは、正月元日を描いた本図に登場している。しかし、55熊本細川斉護は病氣  
のため二日にも参賀しなかったものであり、本図が安政六年正月元日の様子を写したのではないことは明らかである。  
さらに威儀を正した行列が描かれている「薩摩宰相」の場合、大隅守斉興が天保九年(一八三八)宰相となってい  
るが、嘉永四年(一八五二)に隠居している。その子薩摩守斉彬は嘉永五年中将となったが、安政五年(一八五八)  
死去し、同年に甥の忠義が襲封し、翌安政六年二月左近衛少将修理大夫に叙任しており、この時期の藩主は無官であ  
る。斉興が死去するのは安政六年九月であり、正月には生存しているが、『藤岡屋日記』の参賀の次第には島津家は  
登場していない。その他安政六年正月では官名が合わない大名が、表に示したように多く存在する。なによりも、正

月元日と二日に分かれて参賀する大名が同日に本図に登場しているのである。

描かれた旗本は如何であろうか。本図ではおおむね中央に大名が、左右に旗本が配置されているが、「図伝」には彼らの役職が注記されている。表1に掲げたとおり、2三淵虎次郎は天保七年（一八三六）にすでに死去しているなど、旗本五〇名中三五名が安政六年正月当時の役職とは異なっており、三淵のように二〇年以上前に死去しているものも登場しているのである。

4 高木内蔵頭も「御先手御持弓頭」とあるが、このような職名は存在しない。高木は、文政一二年（一二九）に先手弓頭となり、天保九年に持弓頭に移っており、「図伝」ではこの二つの職名をあわせて記している。なお高木は嘉永二年に鑓奉行に転じ、嘉永四年に死去しており、安政六年正月の参賀には存在しない人物である。

ところで旗本のうち小納戸が一三名、小性が八名、中奥小性二名と將軍の側近、とくに天保期の十一代家齊・十二代家慶の側近たちであり、家慶が世子の時代西之丸に勤めたものが多い。そのほかは高家や両番頭など、参賀の儀式に関係したり儀式の配膳を担当したりするものが目につく。その意味では、正月参賀にふさわしい旗本が登場しているともいえる。

描かれた大名から見ても、「図伝」に登場するのは天保改革を断行した77水野越前守忠邦が浜松城主として登場するなど天保期がふさわしく、確定は出来ないものの、本図の作成の基となったのは天保期の史料と推測される。かつ先述したように、正月元日・二日の参賀に参加する大名が混同されて登場しており、何らかの写生が基となったならば、それは正月参賀ではなく節句や八朔などの惣登城の節の下馬先であったと考えられよう。

明治一四年（一八八一）の思い出ではあるが、元古河藩士で国学者であった堀秀成の『下馬のおとなひ』<sup>(15)</sup>には、下馬先の様子を次のように記している。

下馬といふもの多かれと、諸家の登城するは桔梗の下馬、桜田の下馬二所あり、桔梗の下馬桔梗の下馬といふは、此城太田道灌の居城たりしに、太田家の家紋桔梗なりしが、其紋に因て云ひ初めたる由なり、といふは、東に向ひて常盤橋の、内に入り、こゝを大手大手は爰に云所、追手は常盤橋門を云、常盤橋とは松平の称号の縁語に因るなり、といふ、桜田の下馬といふは、南に向ひて外桜田、和田倉などの内にあり、二タ所も金の外にかけたる橋のたもとより、凡そ三十間ばかり放れて、文字ふつらかに下馬とかける札建てたり、この城に登るもの、こゝにて馬よりおるゝ所とす、又鎧、挟箱、牽馬なども必こゝに残すことゝす、二タ所共に東にはなちて、供侍などのまち居る所を設く、長さ六十間計り、奥行六七間あるべし、柱いと太く建並べて下は土間にて所々に腰懸を設く期望また五節司など惣登城といふ時は、三家、また老若の供の外はこゝに入ることを許さず、下馬はこの二タ所共にいと広くはるかに見渡す計りなるを、草の一ト本も立たせず、ちりをすゑぬまでいと清々ときよめたるは、皆こゝの門衛の諸家にてものすることなり、

大手門と内桜田門に下馬札があったという説明であるが、ここには、本図に描かれた内桜田門の下馬先の様子がそのままに描写されており、「供侍などのまち居る所」と記された腰掛が、西之丸大手門以外には本図に描かれておらず、そのために腰掛に待機しているはずの御三家の行列が本図に見えないことも判明しよう。

ところで、本図全体で不審なことがある。大勢の供侍のなかに乗物が描かれている。『徳川盛世録』によれば、下馬先では馬は下りるが乗物は下乗橋まで進みこゝで待機することになっており、下馬先に乗物が置かれることはない。本図の中でも遠景にある国持大名・溜間詰大名などの供侍には乗物が見えず、帝鑑間・雁間・菊間・柳間などの大名の供侍に乗物が描かれている。諸大名・諸役人など惣登城のとき大手門・内桜田門が混雑するので、和田倉・馬場先・外桜田門外を下馬所としたと『徳川盛世録』に見えるが、下乗所を移した記事は見出せない。下乗橋が混雑するために、乗物を下げたのであろうか。今後の検討課題にしたい。

ただ『徳川盛世録』に西之丸は大手際と記載されていることは注目できる。西之丸大手門、現在の皇居正門の外で

下乗したのであり、同門前に乗物が並んだ。同書には、雨中の西之丸下馬先の図が挿絵として掲載されている。しかし、この図を描いたという安政六年には、前年に十四代家茂が將軍となっており、西之丸に大御所や世子はおらず、西之丸の参賀はなかった。西之丸に世子や大御所が居住したのは天保期であり、本図に多少のデフォルメを考慮するならば、天保期における西之丸の下乗を元に本図を描いたとも考えられよう。

### 三 行列の構造

本図の主題である江戸城下馬先は、侍の様子とともに、登城・下城する大名旗本の行列にある。図の右手に見える大手門の前に旗本を中心とした行列が描かれ、図のほぼ中央、内桜田門の左手に薩摩島津家の行列が最も威儀を正して進んでおり、さらに左手に島津家に続くように長州毛利家の行列が小さく描かれ、蓮池三重櫓の前方に忍松平下総守の行列が描かれている。図2の奥の部分の西之丸大手門のあたりには、交代寄合・高家など旗本の行列が見え<sup>(16)</sup>ている。

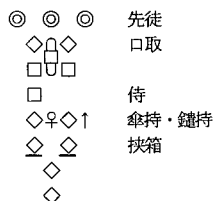
これらの行列のいくつかを图示すると、図3のようになる。まず、小性組番頭の近藤石見守の行列が図3-1になる。先頭に袴で股立ちをとった三名の徒士が行く。これを先徒といい、『徳川盛世録』につきのように説明される。

二千石高及芙蓉之間役人、持高三千石以上の人、高家、交代寄合、那須衆、信濃衆、美濃衆、三河衆、岩松、米良、半井、今大路、吉田、竹田の両法印<sup>医師なり、半井、今大路同列という</sup>、等常に是を召具せり、徒は供方行列の先導たり、故に先徒と云ふ、二千石高未満、芙蓉之間役人にあらずして徒を召具する者あり<sup>先手頭等の類</sup>、然れども先道具、対箱を持たずること能はず、又徒の員数は通常供方侍より一二人を減ず、二千石以下は大概二人、三千石以上三人、五千石

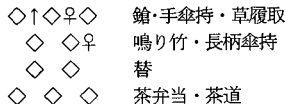
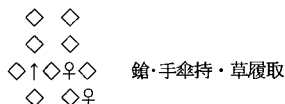
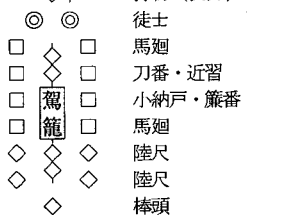
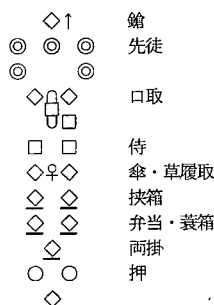


学習院大学図書館蔵「諸大名登城之図」について

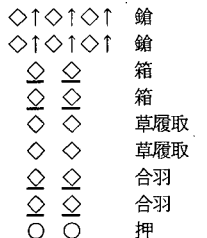
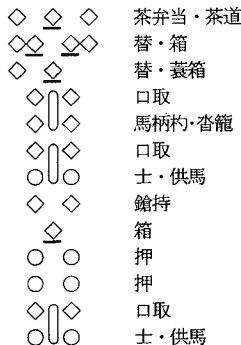
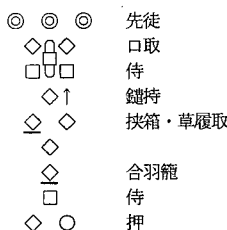
3-1 近藤石見守 5450 石 小性組番頭      3-4 島津宰相行列 参考 島津家行列供揃次第『風俗画報』二号



3-2 榑原織部 1800 石 交代寄合



## 3-3 宮原摂津守 1000 俵 高家



— 凡例 —

□ 目見得	△ 小十人・中小性
◎ 徒	○ 同心・足輕
◇ 小人・中間	
◇ 挟箱など	馬
◇ ↑ 鍵持	
◇ ♀ 傘持	

図3 行列の形態



図4 西之丸大手門と交代寄合榊原織部の行列

以上四五人、万石以上之に准ず、

近藤の場合知行五四五〇石であるため、徒は四、五人いてもよい。近藤の行列は、徒の次に馬上の主人と馬の口取・侍が続き、そのうしろを傘持・鎗持・挟箱持が従う。馬の周りの侍は用人・給人など徒士よりも身分が高い。鎗持は、『徳川盛世録』によれば、役高二〇〇〇石以上の役人・芙蓉間詰・三〇〇〇石以上の寄合・高家・交代寄合などは「先鎗」、すなわち行列の先頭に鎗を立て、それより下層の旗本は「跡鎗」といい主人の後ろに鎗を立てるとあるが、近藤は跡鎗であり、『徳川盛世録』を基準とすれば、五〇〇〇石以上の小性組番頭という格式よりもやや低く描かれている。そのさらに後を二名の奉公人が歩いており、一名は荷物を背負い、一名は何も持っていないが、雨具持と草履取であろうか。草履取であれば主人の側近くにいってもよいが、彼らの役割は明確ではない。

図3-2は、136交代寄合の榊原織部の行列である(図4)。

榊原家は一八〇〇石で、交代寄合として参勤交代を義務付けられていた。同家は久能山東照宮の宮番を世襲した家であり、

格式は譜代大名嫡子に準じられたという。榊原の行列は、交代寄合としての格式を誇示するようにまず先鎗、ついで先徒五名が進む。大紋を着用した榊原が馬上、周りに口取と侍がおり、傘・草履取・挟箱・弁当・蓑箱が続く。挟箱は先鎗を立てるものは対すなわち二箱を持たせると『徳川盛世録』にあり、説明の通りの図となっている。弁当は、同書に御三家・国主・溜詰・大広間大名・交代寄合・山名氏が持たせることができ、数奇屋坊主をともに加えると記されているが、本図に坊主は見出せない。最後に押が二名描かれている。『徳川盛世録』には、

押は足輕（今、卒なり）、三千石以上以役上（役人は三千石高以上、美譽之間席）よりこれを召連る、下供小中者間を支配す、五千石以上は両押と称し兩人を具し、五千石未満は一人を具す、これを片押という、持高三千石以上及び両番頭、大目付、三卿家老の押は袴を著し、その他は袴を著さず尻端折なり、羽織は木綿にして多くは黒又は紺色を用う、背に大きな紋（その家の記号なり）一個を染め出し、長きことほとんど足の甲に至る、

と説明されるが、榊原が一八〇〇石であるにもかかわらず「両押」であるのは、譜代大名の嫡子の格式を持ったためであらう。押の服装も背に紋のついた紺の長羽織で、袴を着用しており、榊原の格式を考えると上記の説明に合致する。もう一名、図3-3の139高家の宮原摂津守の行列を検討する。行列の構成は図3-1の8近藤石見守に近いが、宮原が馬上で狩衣を着用しており、高家としての格式を保っている。押も一人の「片押」である。なお近藤の行列にも最後に押がいたはずであるが、描かれていない。

本図に描かれた行列のうち最も整然とした75薩摩島津家の行列が、図3-4である（図5）。まず対先箱が進み次に対鎗が続く。島津家は鎗三本であるが、二本は対先鎗で一本は乗物の後に立てられている。ついで徒の行列が続く、打物すなわち長刀が立てられ、乗物の前に中小性が控え、その後を素襦・布衣を着用した馬廻や側近に囲まれた乗物が行く。乗物を担ぐ陸尺や手代りの跡を鎗持・傘持・草履取が行き、対挟箱・蓑箱・茶弁当とともに茶道が続く。そ

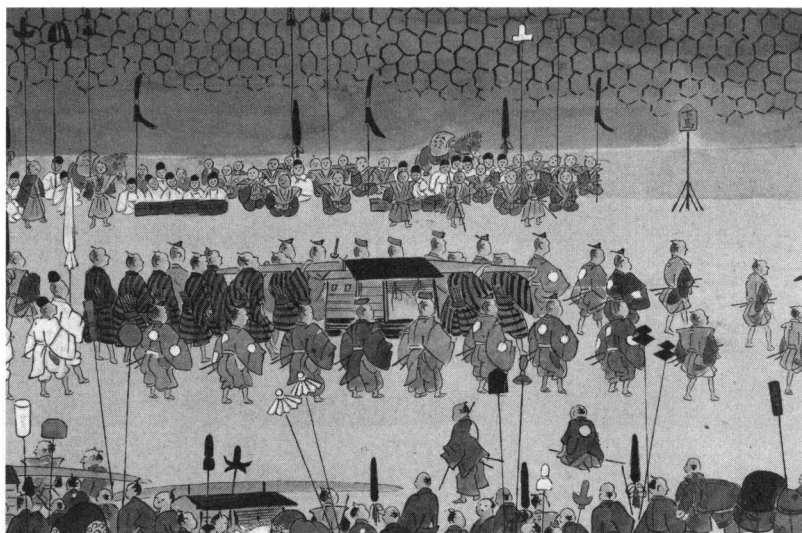


図5 薩摩宰相の行列

の後を馬が二疋牽かれていき、押が最後に行く。比較のため、『風俗画報』二号（明治二二年）<sup>17</sup>に掲載された島津家行列供前次第を図示した。この史料の出典は不明であるが、月次などの登城のようであり、正月参賀を描いた本図のほうが乗物の周囲の人数が多いが、本図と基本的には変わらない。ただし『風俗画報』の後半に記された供馬・供鎗・挟箱・草履取・合羽籠などが本図からは抜け落ちている。この部分は乗物の周囲にいる馬廻や側近たちの陪臣であり、本来なら鎗や挟箱を持たせ供を従える身分を持つ武士が、藩主に近侍しているため、自分たちの供や道具を行列の最後部にまとめたものである。乗物の周囲の武士が多ければ多いほど、陪臣の人数は増加するはずであり、本図にこの部分が省略されているのは、威儀を正した行列を強調するため、先頭の先箱・対鎗や藩主周辺のみを描き、後部の雑人たちを黒子的な存在として問題にできなかったためであろう。

その意味では、大きく描かれた譜代大名の106忍松平の行列も後半の陪臣の部分が省略されており、旗本たちの行列にも合羽籠が見当たらないなど、雑人が省略されているように思

われる。

以上から、本図に描かれた行列は、おそらく全体を描いたものは少なく、行列の目印となる先頭の部分や主人の乗物・乗馬の周辺をていねいに描き、雑人や荷物などを省略する傾向にあったことが判明する。本図から行列全体を考えるには、他の史料との比較検討のうえ、描かれなかったものが何かを想定する必要がある。

#### 四 奉公人と商人たちの姿

堀秀成の『下馬のおとなひ』には、下馬先で待つ供侍や見物人、彼らを相手にした諸商人の様子を次のように記している。

大下馬に供侍するさまは、大家のかぎりは鍵を正しく立てさせて、鍵持手代りしつゝみだりなるけはひなめるを、小家なるは、挟箱の棒に手拭の布にてくゝりつけなどして、ゆがみ傾きて見ゆ、侍は供侍（供侍のもたす挟箱を云）に腰打かけ、あるは土の上に下座敷といふものしきてあるもあり、弁当はしらげあしき飯を、長めの箱につめて、ひじきあぶらげやきどうふなど、合せものとす、そのかたつかたにいろあせたる沢庵の香のもの、あつく切りたる二ツ三ツあるめり、茶は穴をうがちたる樽につめて木枯らしにちりたるやうなるを煮て、日あたりの夏の水よりぬるかりき、雨などの日はおのがかぶれる笠のはしより、弁当の中にアマダ李おちなどして、わびしさかぎりなし、駕籠脇の侍だにかゝりけるを、末々のものは思ひやられてなん、こゝは打霞む計りいと広き所なるに、立ならべたる鍵はむさしの、原といひしときの尾花の末にひとしく、馬はよそひしたれど、むさしの牧ときこえたるむかしにも似たり、侍は懷より詩歌の横綴本とりいで、ひざの上にて見つゝあるも、芝居の番附といふもの、よし

原の細見など見るもあり、下部は下座敷の上にひち枕したるもあり、国々より江戸詰めにもものしたるが、下馬見物といふにいでたるを見れば、寺島亀戸の里あたりより、こやしとりにし舟のたわしに似たるかしらつきし、小倉の袴つばくらの羽織きて、立並べたる鎗と武鑑とてらし合せつゝめぐりけり、ござを着たる翁、白き袋かけたる老女など、この所のありさまにたまげはてゝ立つめり、立売の商人はこんにやくのでんがく、あまぎけ、すみぎけ、すし、作菓子など、皆下部の買ふものなり、売りありくこゑ一ト際高く聞こゆるは、江戸絵図、年代記、よし原細見、御大名附、御役人附、御役替改りといふは、ふし皆比しかりき、千万人のもの談のこゑとよめき、こゝだくの馬いなゝき、中空にひゝきわたれり、

下馬先の供侍のとき、有力な大名などは鎗を整然と立て、鎗持を交替させるなどして秩序を維持しているが、小大名や旗本などの供の中には挟箱に手拭で鎗をくくりつけるなど曲がっているものもある。侍は挟箱に腰掛けたり敷物に座ったりして、粗末な弁当と茶を食する。駕籠脇の侍さえ、雨天のときは笠の滴が弁当におちるほど、わびしい姿であるという。著者は鎗や馬を武蔵野の薄や放牧された馬になぞらえ、広大な広場に人や馬が集まりながらも、待機するばかりですさんだ風景や人々の心情を描き出している。ひまな従者たちは、詩歌の本や番付、吉原細見などを見たり、奉公人のなかには寝転ぶものさえいる。参勤交代で江戸詰めとなった藩士が、田舎者の姿で武鑑と照らし合わせながら、行列や待機の従者を見物し、乞食の姿で歩きまわるものもある。

一方、従者や見物人を相手にした商人の姿は活気にあふれて描かれている。蒟蒻の田楽・甘酒・清酒・鮎・菓子などの露店が点在し、奉公人たちが集まる。江戸絵図・年代記・世志原細見・一枚刷りの大名や諸役人の名簿・役替えの記事などを、声を張り上げて売り歩くものもある。人々の話し声や馬の嘶きが空に響き渡っていると、記している。侍たちを中心に鎗を立てて待機している姿と、そこを離れて立売の商人に群がる下層の奉公人たち、見物人や商人た

ちの動きが対照的である。

本図に描かれた風景も対照的な二つの場面となっており、左右や中央遠景は威儀を正した行列や整然と待機する従者たち、中央前方の供待の場面は、寝そべって行列を眺める奉公人たち、行列を離れて主人が異なるさまざまな従者たちが話に花を咲かせたり、買い食いする奉公人や見物人、商人などであり、立売の商人の周をうろつく犬までも登場する。「図伝」にも、「当日下馬場ニ出テ飴菓子等ヲ売者アリ、又越中富山ノ売薬数名出ツ、又大名ツケト唱へ袖中武鑑等ヲ売来ル者アリ、又諸方ヨリ為見物出テ来ル者アリ、又町人年始トシテ通行スルアリ、」と、越中富山の薬売りまでを登場させている。

本図から注目できる奉公人や商人などの姿を数例垣間見ておく。内桜田門とその左にそびえる寺沢二重櫓の前面に、帝鑑間詰の40豊後府内松平左衛門尉・44出羽松山酒井石見守・45遠江横須賀西尾隱岐守、菊間詰の46下総多古松平相模守、柳間詰の48播磨三草丹羽若狭守などの従者が待機するなか、長持を前に手拭をかぶった男が演芸に興じており、数名の男たちが座って見物し、掛け声をかけている（口絵図版9）。退屈な下馬先で、芸達者な従者の一人が余興を演じていた事実とは、文献では確認できなかった。

その左手、富士山が描かれた部分の最前面に、引き出し付きの台で物を売っており、客が何かを食べている場面がある。鮎か菓子などの商人と思われるが、詳細は不明である（図6）。商人の左には子供がまとわりつき、右には幼児をおぶった女性が、子供をつれて商人のほうへ向かっている。この商人の家族であろうか。さらに左手には飲食をさせる立売の商人が四人ほじろいるが、それぞれ食物は不明である。この周りに野良犬がたむろしているのも注目される。蓮池三重櫓に向かって106忍松平下総守が威儀を正して登城する左手には、小納戸衆など旗本の従者たちが待機しているが、その後ろにはこの行列を無視するように寝そべった五人の男たちがいる（図7）。待ち疲れた旗本の従者た



図6 立売の商人

ちであろう。さらに左手の二重橋の前方には、小さな箱を首から提げた子供が奉公人たちに取り囲まれ、小さな紙を箱から出している（口絵図版10）。おそらく、武鑑や番付の類を販売しているのであろう。菓子や酒を売る商人たちがおり、奉公人たちがたむろし野良犬も集まっている。その下にも子供を連れた女性がいるが、やはりいずれかの商人の家族であろう。

これらの奉公人・商人のほかに、本図は見物人や通行する僧侶・三河万歳など多様な階層の人々を描きこんでいる。これらも今後商人を描いた絵図や文献ともあわせ検討する必要がある。

本図全体としては、安政六年正月元日における大名旗本の登城を忠実に描いたものとはいいがたく、正月元日・二日の参賀に登城する大名が混在して描かれ、登場する大名旗本も安政期よりも天保期の人物が多い。また行列も省略された部分があり、実態を示していない部分が多い。また待機している従者たちの姿も、乗物が下馬先に並んでいるなど不審な点が見える。しかし、後方の行列や待機する従者とは異なった、





図7 忍松平下総守の行列と寝転ぶ奉公人

行列という支配の枠組から飛び出して自由闊達に行動する奉公人や、たくましい庶民の生活を窺わせる姿が中央の最も前面に描かれているのは、当時の下馬先の活況をよく示していると思われる。ことに、これらの徒・足輕はじめ中間などの奉公人の多くは、人宿が請負った日雇であり、主人との間に主従関係の絆はなく、法外な下馬先での行為がたえず取締りを受けていた<sup>(18)</sup>。彼らの存在形態を含めて、今後さらに検討する必要がある。また堀秀成の著作と同様に、下々の奉公人・庶民を生き生きと描いているのは、明確には判断できないものの、明治中期に死去の年に描いたという事情から、作者の心情の表れでもあろう。

本図については、なぜこの時期に図を作成したのか、また安政六年正月元日の下馬先図としたのか、他に如何なる史料を使用して描いたのか、また鎗印や乗物など、まだ検討を加えるべき問題が多く残っており、今後さらに考察していきたい。

(1) 上野秀治「大名家格制についての問題点―官位制を中心にして」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和四十八年度、一九七四年)、松尾美恵子「大名の殿席と家格」(徳川林政史研究所『研究紀要』昭和五十五年度、一九八一年)、堀新「近世武家官位の成立と展開」(山本博文編『新しい近世史』1、新人物往来社、一九九六年)、橋本政宣編『近世武家官位の研究』(続群書類従刊行会、一九九九年)、吉田昌彦「近世確立期將軍宣下儀礼に関する一考察」(『九州史学』一一八・一一九、一九九七年)、川島慶子「寛永期における幕府の大名序列化の過程」(西村圭子編『日本近世国家の諸相』、東京堂出版、一九九九年)、大友一雄「近世武家社会の年中儀礼と人生儀礼―はじめての御目見に注目して」(『日本歴史』六三〇、二〇〇〇年)、同「近世の武家儀礼と江戸・江戸城」(『日本史研究』四五八、二〇〇〇年、二木謙一「武家儀礼格式の研究」(吉川弘文館、二〇〇三年)、同「將軍宣下儀礼の変遷」(同編『戦国織豊期の社会と儀礼』、吉川弘文館、二〇〇六年)、朝尾直弘編『譜代大名井伊家の儀礼』(彦根城博物館、二〇〇四年)、小宮木代良『江戸幕府の日記と

儀礼史料』(吉川弘文館、二〇〇六年)、岡崎寛徳『近世武家社会の儀礼と交際』(校倉書房、二〇〇六年)など。

(2) 久留島浩・吉田伸之編『近世の社会集団―由緒と言説―』(山川出版社、一九九五年)、大友一雄『日本近世国家の権威と儀礼』(吉川弘文館、一九九九年)、井上攻『由緒書と近世の村社会』(大河書房、二〇〇三年)、山本英二「近世の村と由緒」(『歴史評論』六三五、二〇〇三年)、岸本覚「近世後期における大名家の由緒―長州藩を事例として―」(『歴史学研究』八二〇、二〇〇六年)など。

(3) 吉原健一郎『江戸の情報屋』(日本放送出版協会、一九七八年)、藤實久美子『武鑑出版と近世社会』(東洋書林、一九九九年)など。

(4) 岩淵令治「江戸城登城風景図屏風―幕府儀礼の「名所」化―」(国立民俗博物館編集『歴博』一二三、二〇〇四年)。

(5) 江戸東京博物館図録『江戸城』(二〇〇七年)などに写真版が掲載されている。

(6) 岡戸敏幸「伝大久保一丘筆 洋風人物図について」(『古美術』八七、一九八八年)、金原宏行「洋風画家大久

保一丘―真人図を中心に―」(『幕末から明治へのめまぐるしい美術』、沖積舎、二〇〇二年)。

(7) 注(6) 金原前掲論文。

(8) 注(6) 岡戸前掲論文によれば、国立国会図書館に大久保一岳「諸侯登宮之図」全六帖の写生帖があり、不定形の紙片に描かれたデッサンが張り込まれてあるというが、実見していない。

(9) 旗本の経歴は、大久保一岳の注記および東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 柳宮補任』(東京大学出版会、一九六三―六五年)による。

(10) 大名の特定に当たっては、『藩史大事典』第1巻―第8巻(雄山閣出版、一九八八―九〇年)、新田完三編『内閣文庫蔵諸侯年表』(東京堂出版、一九八四年)などを参照した。ことに小川恭一『江戸幕藩大名家事典』上・中・下巻(原書房、一九九二年)の学恩に浴した。以下、諸大名の経歴はこれらの諸書を出典とする。

(11) 江戸叢書刊行会編『江戸叢書』一卷(大日本図書センター、一九八〇年)所収。

(12) 小野清『徳川制度史料』(六合館、一九二七年)

(13) 明治二年刊の和装本を使用した。『東洋文庫』四九六(平凡社、一九八九年)に翻刻され、久留島浩・宮崎勝美氏の詳細な解説がある。

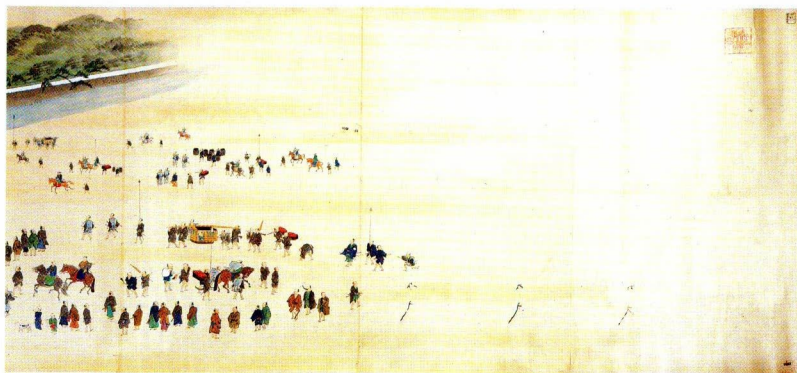
(14) 近世庶民生活史料『藤岡屋日記』第八卷(三一書房、一九九〇年)四〇九頁。

(15) 『日本随筆大成』第二期三卷(吉川弘文館、一九九五年)所収。

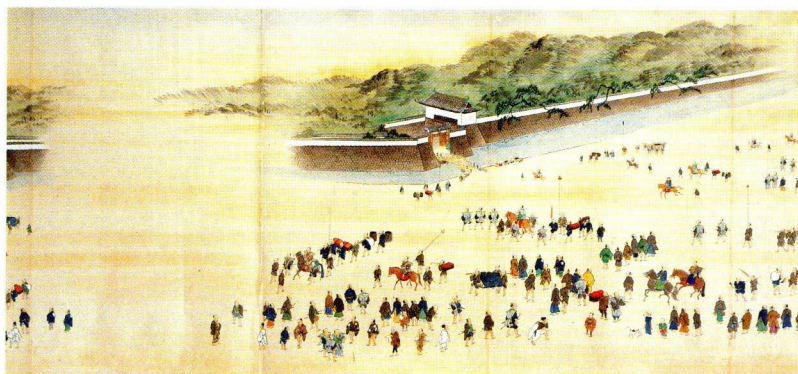
(16) 行列の構造については、拙稿「享保期日光社参における將軍の行列」(『大日光』七五、二〇〇五年)参照。

(17) 『復刻版風俗画報』第一期(国書刊行会、一九七三年)所収。

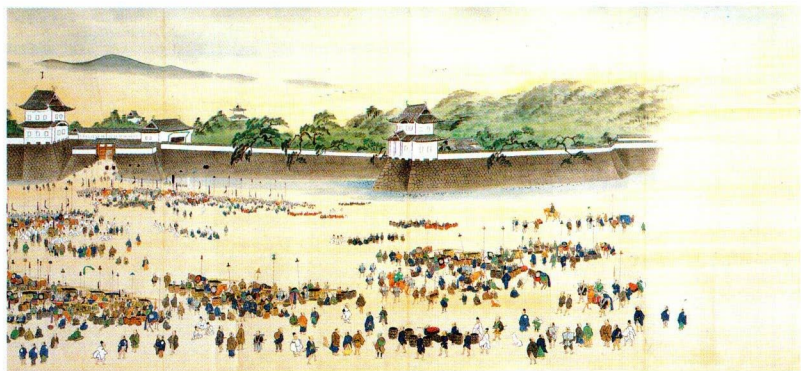
(18) 「人宿取締之部」(東京史料編纂所編『大日本近世史料 市中取締類集』二五、二〇〇二年)一五四頁。



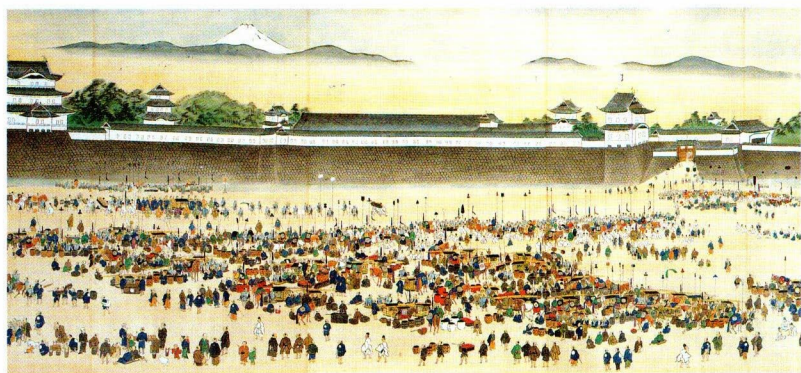
図版 3 旗本たちの行列（学習院大学図書館蔵「諸大名登城之図」）



図版 4 大手門前



図版 5 内桜田門と桜田巽二重櫓



図版 6 蓮池巽三重櫓と本丸御殿・内桜田門





図版 7 西之丸大手門と坂下門・蓮池巽三重櫓



図版 8 西之丸と西之丸大手門



図版 9 待機の中で余興に興じる従者



図版 10 物売りに群がる従者たち